

京鹿子

平成二十九年十月一日発行
通巻二一八号(毎月一回一日発行)



10月号

鈴 鹿 呂 仁

拾 掬 集 その 二 十 五

朝 顔 や 余 生 の 蔓 の 先 走 り
秋 蟬 の 遠 嶺 を 寄 せ る 鄙 暮 し
流 星 や 語 尾 を 失 ふ 北 の 果
星 飛 ん で 天 の ポ ス ト の ふ く れ だ す
蝨 嘶 鳴 い て 硬 派 軟 派 の 探 り 合 ひ
儘 な ら ぬ 軟 骨 ひ と つ 振 れ 花





茸生る不眠の街を蝕めり
蹠ほとほの熱ほとほり冷ます川晩夏
白秋の池面に遊ぶ嵯峨の雲
広沢へ軋む牛車や車夫涼し
見ゆれば二尊は涼し右手左手
化野へひぐらしの径綴りたる
鉾杉の秀へ秋声の雨降る
日章の際立つ白さ秋のこゑ



近詠

鈴鹿 仁

遠かなかな

新涼の飼葉の匂ひ風太る

一鍬土のひびきし秋の声

遠かなかな愛宕の山の一つ影

星飛んで山の稜線膨らます

星ひとつ流れて人の噂消ゆ



—
近 詠
—

和田 照海

浜昼顔

観音へ灘が差し出す夏の月

浜昼顔海より闇の来てをりぬ

落潮に天草採りの舟たむろ

羽抜鶏媚び歩きして島の寺

ひびきあふ卑弥呼の里の落し水



英華採集

東京に窓がたくさん夜の蜘蛛

上 田 河 西 志 帆

昔、東京という大都会を称して東京砂漠である、との歌詞が流行した。あれから、数十年を経た今日、東京の外観は急速に進化しつづけているものの、人間の心の闇も増え続けているのではないか。掲句の窓は、高層化したビルやマンションが林立し、外側と隔絶された多くの閉鎖された人間の心の内側を象徴しているのであらう。その窓の向こう側には、隙あらば進入しようとする狙っているもの、既に心の中へ侵入しているもの、いわば魑魅魍魎が居る。季語の「蜘蛛」が鮮烈である。

かき氷「泣いた赤鬼」とけてゆく

京 都 鳥 羽 夕 摩

熱^{あつ}くっている身体が、直ぐに涼しくなるのがかき氷。お店で食べるかき氷が定番であるが、今では家庭の中で気軽に作れるかき氷もある。泣いている幼い子供へ、お母さんがかき氷を与えると、泣きじゃくりながら食べている子供の涙が止まる。「泣いた赤鬼」を子供の比喻と捉える楽しさと苺のシロップが氷に溶けてゆくという二つを重ね合わせた妙がある。

花火の夜不眠鴉のぐずる声

相 生 禰 寝 瓶 史

打上げ花火を見てきた高揚感は、家に帰って来てからも長く続くことであらう。目は閉じてはいるものの中々寝つかれない時間がつづく。眼底の深い闇の中に、同じく眠れない鴉のぐずる声を聞くことになった作者は、人間が楽しんできた花火の音は、鴉にとつては只の騒音に過ぎない事を知る。鴉が、楽しみの底方に潜む不条理を教えているのかもしれない。

松本 鷹根



塩貝 朱千

百日紅

朱の社拍手雨後の万緑へ

一色を一途に辿る青田道

藤は実になりて湖風を弄ぶ

蝉時雨神樹の零す日に浴す

百日紅ふはり郷愁活かす雲

近 詠

ハンカチ

溪流やきりきり冷やすアールグレイ

人想ふ日はハンカチを真つ白に

チエンバロの音乾きぬて土用東風

湖風の乱す群舞や向日葵畑

もの忘れ笑ひとばして大緑蔭



梶の鞠 藤岡紫水

方丈に風の一字の古団扇
 月光をつれて風来る窓の秋
 赤のまま捨て積みされし野の佛
 鳳仙花弾けし先の山に雲
 蹴り終へて脱ぐ冠や梶の鞠

虫時雨 沼田巴字


どんぐりのこぼれてからの日の繋り
 眠りこそ旨さの秘密酢荃樽
 裏山を揺する夜風や葛湯溶く
 氏素性問ふことのなき虫時雨
 秋の雲人恋しさにちぎれをり

黒鋼 丸井巴水

的外す距離にはあらず花魅草
 珈琲の氷が解けてからむ指
 切手裏濡らし遙かにせし青夜
 黄昏て蒲の花より語り来る
 黒鋼の蟻が膝まで来て迷ふ

麦の秋 植村蘇星

農魂や曆先取り麦の秋
 天空を焦がすがやうな麦の秋
 宙広しぐいぐい蛭交錯す
 工房の四季の彩り梅干さる
 水打つや縁は異なもの婚結び



神麓集

炎 天 北川孝子

仮の世の夢見心地や八月来る
炎天へ歩む一步のいとほしき
人生の轡打恋ふ夜の火蛾狂ふ
身の枷を解かるるやうに梅雨の果て
人はみな何かに祈る八月忌

青 む 直江裕子

外に出よ衰へゆく身の青むまで
言ひくるめられてゐる六月の河
あぶな絵の確かどこかに梅雨に入る
くちなしやふつと昔が腑に落ちる
安らぎと幸せちがふ竹落葉

雷 鳴 高木晶子

梶の葉に一筆漂流郵便局
紫陽花の彩を違へて句の仲間
睡蓮の咲きて天地の境とす
梅雨の傘選ぶ一本諸事多難
若人の居場所雷鳴するところ

阿弓流為の影 伊藤希眸

螢とぶ背^マまでの髪消えてゐる
阿^ア互^テ流^ル為^キの影は幻し卯波立つ
雪嶺のはるか鷺草翔たむとす
夏空やしぶき吹き揚げ岩屏風
乙姫を底に渦巻く青葉潮



神麓集

予 感 木戸 渥子

片隅のどくだみの基地進軍中
虎が雨あしたは楯になる予感
内気とはとても思へぬサンガラス
白靴に泥はね両手にレジ袋
梅花藻やひたすら流れに身をまかせ

死 角 奥田 筆子

白百合の嚙下の露の走りけり
蓮の花まん中カプセルホテルあり
キヤベツ畑ちよつと大き目のパジャマ
冷奴差し向かひといふ死角
レモン切りしナイフに吹出物あまた

花合 歓 井上 菜摘子

かたつむり一つ手前を曲りけり
渋団扇席を外してくれないか
内輪話なんじやもんじやの花咲かす
花合 歓の睡りにつきし別れ際
蜘蛛の子とぶ風に光の水尾曳きて

蝉の朝 村田 あを衣

蝉の朝地方紙ひらく山の宿
からす鳴く声さへ涼し永平寺
禅寺に拾ふ病葉瀬に乗せし
うつし世の名残り病葉反りみたる
わが家系辿れば庶民バツタ跳ぶ



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

言葉みな青葉雫となる別れ

青すだれ置屋小路の昼下がり

田植機の余韻ひたひた村灯る

明易し短編で足る私小説

はつけよい残つた残つたあめんぼう

売れ残るパンの棒立ち走り梅雨

晩年のちらちら梅雨のど真ん中

短夜の貼り損ねたる湿布葉

折鶴の千には遠き夜の短か

青すだれ母の部屋より水の音

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

朝ぐもりひつくり返すパンケーキ

河口まで揚羽のゆるき翅つかひ

啄木のローマ字日記黍嵐

吹けばまた火種をふやす灸花

真桑瓜美濃は平らに昏れゆけり

さくらんぼまだ熟さざる昼の月

舞ひ上る夏蝶視線ふりほどき

見物に出るは億劫まつり鱧

水の辺の風見ゆるかな細葉蓼

肩うすき男女たたずむ星まつり

城陽 鷺山 珀眉

京都 片山 熙子

朝風やいま散るものに咲くものに
巢立鳥さすらふ水に佇ちつくす

福山 亀井 福恵

小夜更けてより淋しらに青葉木菟
額の花空の濁りを好みけり

灯を洩らしをれば応ふるほとどぎす



東京に窓がたくさん夜の蜘蛛

上 田 河西 志帆

蚊柱のどうでもそこに立つ理由

いくつもの息つなぎ合う水中花

軍港の舟虫から捕らえられ

かき氷「泣いた赤鬼」とけてゆく

京 都 鳥羽 夕摩

文月のふみは母の名屋ひとつ

あぢさゐの闇に掴る早さかな

あさがほの軽さに老人青くぬる

花火の夜不眠鴉のぐずる声

相 生 彌寝 瓶史

麦飯の湯気盛り形身の有田焼

終電後田蛙徐々に静もりぬ

梅雨の雷うみのおくやま妻こえて

妻と行くやさしさ落ちる女滝かな

過現末のよもやま話夏茶碗

遠雷や神に急かるる石百段

新緑を行く純白の新夫婦

雪はとけ庭のみどりと空の青

黄水仙芝生の中でにこやかに

夕風のひとり居の時はなやげり

若みどり我に挨拶風終る

五色沼いろも鮮やか青時雨

蔑切に急かるるやうに球を打ち

さくらんぼ昨日は昨日今日は今日

腕立て、伏せて八十青葉風

水茄子の初採りは郷里の味

双子に色柄違へて甚平縫ふ

梅雨晴れ間風と日ざしを通しけり

枝豆を囲み笑顔で手を伸ばす

五月雨や窓際の犬首傾げ

格子戸の茶房に妻と字治水

静けさや苔生す甕の錦鯉

唐橋や湖水静かに走り梅雨

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

酒 田 藤波 松山

渋 川 東 秋茄子

さいたま 神田 惣介